

**「大妻女子大学人間生活文化研究所の研究と歴史」
P184～185より抜粋**

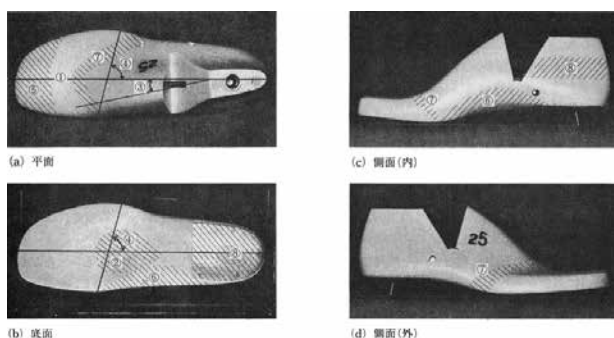
『大妻女子大学人間生活文化研究所の研究と歴史』，
大妻女子大学人間生活文化研究所，
2019，
<https://www.ihcs.otsuma.ac.jp/ebook/book.php?id=63>
(参照 2020-06-09)

5. 産学共同研究

■大塚製靴株式会社との共同研究

研究所が行った企業との共同研究の中で代表的な研究は、大塚製靴株式会社との共同で行った「現代日本人の歩行に合う靴の研究」である。これは同社の大塚斌社長（後に会長）が近藤四郎教授に師事し、1990年に研究所員となって以来、一貫して取り組んでいた課題である。履き心地の良い靴を科学的なエヴィデンスに基づいて提案し、実際に靴を作製することを目指していた。研究所員の協力のもとで同社の社員の方々が研究所においでになり、徹底的に足部の計測を行い、これをもとに靴を製作した。こ

の時に歩行実験を行うために当時は珍しかった高価なフォースプレートを使用して床反力を測定しつつ、精密な靴の設計を行った。研究成果はやがて1997年には大塚氏の博士論文となって結実した。一連の成果は「皮革科学」43～44巻に掲載されている。実際にこの研究は同社の新発売の靴設計に活かされたと聞く。筆者も何足か買い求めたが、実に履き心地は素晴らしかった。同氏との共同研究はその後も続き、やがて同社の社員の方々が研究所所員となった。



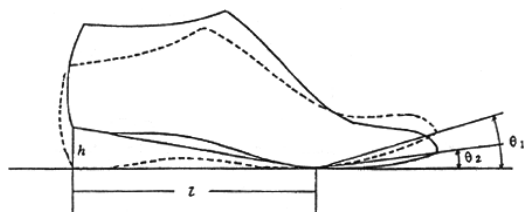
大塚斌 (1998) 人間生活科学研究所年報 Vol. 9 p. 103より引用

図1. 大塚氏が作製した履き心地を良くした靴の木型

■ブリヂストン技術センター（株式会社ブリヂストン）との共同研究

研究所の初期には1987年～1989年、ブリヂストン技術センターの山田忠利研究員が近藤教授の指導の下、真家講師の支援を受けて老人靴の靴型設計

を試みていた。実験は老人の歩行の特徴を解析して蹴りだしにおける推進力に着目した実用度の高い研究であった。やがて山田氏はこの研究を軸にした博士論文を提出した。Journal of Home Economics of Japan, vol. 39に掲載されている。



$$\theta_1 = \theta_2 + \tan^{-1}(h/z)$$

Yamada, T. (1988) 人間生活科学研究所年報 Vol. 3 p. 137より引用

図2. 山田氏が提案した蹴りだしにおける推進力に着目した靴の側面

■株式会社オカムラ（旧株式会社岡村製作所）との共同研究

研究所の賛助企業の一社である株式会社岡村製作所との共同研究を2014年から2016年に行った。研究所としては大澤教授と被服学科からデザインを専門とする中川麻子准教授が参加している。研究の内容は女性がいかなるアメニティ空間を好み、いかなる家具を選好するかを統計学的な調査から解明しようとするものであった。調査とデータ解析には同社のデザインの専門家たちが積極的に行った。研究

成果は人間生活文化研究No.26に掲載されている。

■大妻女子大学北タイ学術調査1992

1992年に近藤四郎所長以下、松山容子被服学科教授、下村道子食物学科教授、笹本信子被服学科助教授、真家利生研究所講師、川上梅研究員、益本仁雄研究所教授、田中秀幸助手ほか、大塚製靴株式会社社員3名による学術調査が企画された。これは、新しく研究所情報部門の教授となった益本氏が長年にわたって昆虫研究で通っておられたフィールドを使って、新たな研究課題を実施しようという試みであった。現地調査は、益本教授と現地ガイドのM氏の奔走によって初めて可能となったもので、その際に現地カウンターパートになっていただいた郡教育長コソン氏（のちのチェンマイ県教育長）、プラシットサムーン郡教育長らの協力なしには実現できなかった。また、調査資金については研究所研究員で大塚製靴株式会社社長の太塚斌氏のご厚意によった。

研究所としては、それまでもタイでは大澤教授が東北タイで研究プロジェクトを展開していたが、新たに北部タイに調査地を拡大するものでもあった。派遣された殆どの団員たちにとっては、海外調査は初体験であったので、不安とともに、好奇心を掻き立てられるものであったと思われる。研究班は大別して被服系と食物系に分かれて足部計測班と形態計測班、食事調査班などで構成された。調査対象は、チェンマイ県アンプームアン（チェンマイ市）周辺の学校と交渉して、結果的にはナワミン中高校、ユッパラー中高校となった。両校ともにこの地方では名門の大規模校である。計測調査は、連日の朝から夕刻までの強行軍で行われた。食事調査班も計測機器を持参して各調査対象地や店舗をまわり、収集されたデータはその後まとめられて家政学会誌、家政学部紀要などに報告されているほか、またこれらは人間性を年報に掲載されている。

これを契機に、現地と研究所の協力関係が形成されていった。チェンマイ市の教育組織の幹部が研究所をはじめとする大妻女子大学を見学し、さらに初等・中等教育専門の先生方は、神奈川県北部の教育委員会と傘下の初等・中等学校の教育実態の研修を行った。研究所からは、益本教授がチェンマイ教育大学、主要な中学・高等学校を訪問し、教育現場の実態を把握するとともに、後々のこの地域のフィー

ルドサーベイを可能にする下地を作った。

また、研究所は、東北部にある国立コンケン大学農学部との学術交流に関する協定を1999年に結んだ。これに基づいて、現地からユバ・ハンブンソン教授をはじめ、大学院生が来日し、研究所の活動実態を把握し、帰国後の活動に生かした。研究所からは、同じく益本教授、宇都宮氏が現地を訪問し、フィールドサーベイの協力を得た。これらの活動を通じて収集されたデータはそののちにいくつかの論文として発表された。